

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13384

研究課題名（和文）古代ローマの庭園と「フォーマル・ガーデン」の起源に関する研究

研究課題名（英文）Ancient Roman Gardens and the Origins of Formal Gardens

研究代表者

川本 悠紀子（Kawamoto, Yukiko）

名古屋大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：70780881

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、シンメトリーに植物が配置され、草木が剪定されたフォーマル・ガーデンと呼ばれる庭園の起源が古代ローマ時代の庭園にあるとするこれまでの言説を再検証し、なぜこのような言説が生まれるに至ったのかを考察することを目的とした。なぜなら、発掘成果や、史料・壁画の分析からは、フォーマル・ガーデンらしき要素を古代ローマ時代の庭園に見出すことは困難だからである。本研究により、英国においてフォーマル・ガーデンに見られる迷路のような庭園造形は古代ローマ時代の史料に依拠していなかったことが明らかになった。さらに、ラテン語文献の精査により、哲学が庭園や建築に影響を与えていたと判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

西洋の庭園に見られる「フォーマル・ガーデン」の起源は、古代ローマにあると考えられてきた。しかし、本研究により16世紀イングランドに登場するフォーマル・ガーデン的特質を持つ庭園造形は、古代の著作が影響を与えるようになる以前から存在していた可能性が高いと明らかになった。また、古代ギリシアの哲学が庭園や建築に与えた影響力の高さも判明した。このように、本研究は文化の伝播とその形成の一側面を示したと考える。

研究成果の概要（英文）：Formal gardens adorned with trimmed plants have been regarded as the repertoire of Roman gardens. The basis for this belief comes from the evidence of 'opus topiarium' and trimmed plants in Latin texts. Wall paintings, descriptions in texts, and excavated Pompeian gardens suggest that the Romans had densely planted gardens resembling natural groves, challenging our previous conception of Roman gardens. This project aimed to reassess how ancient Roman gardens were described in texts, and to understand how ideas of Roman gardens had been transmitted and adapted in later European gardens.

Due to the pandemic, the archival work was restricted. However, this research had successfully shown that ancient literature was not evidently influential when formal/ornamental gardens and mazes were constructed in England during the 16th century. In addition, this research presented that Greek philosophy played an important role when ornating architectural and garden settings in ancient Rome.

研究分野：西洋古代史、西洋古典学、建築学

キーワード：古代ローマ 庭園 フォーマル・ガーデン 建築 ポンペイ 哲学

1. 研究開始当初の背景

これまで古代ローマの庭園の意匠は、シンメトリーに植物が配置され、草木が剪定されたフォーマル・ガーデンと呼ばれる西洋の庭園空間の起源であると考えられてきた。小ブリニウスをはじめとする古代ローマの作家によって書かれた史料が「*opus topiarium*」とよばれる技法を用いて木々を刈り込んで様々な形にしたと言及していること、木々の剪定や庭園空間に配置された彫刻などに植物を巻き付かせるなど装飾的配慮がなされていたことが史料の中に記されていることなどが背景となり、このようなフォーマル・ガーデンに対する理解が形成・提唱されてきた。そして、ルネサンス期以降の庭園では、古代ローマの史料を手掛かりに古代ローマの庭園を再現する試みが行われた結果、左右対称に草木が植えられた大規模な庭園が欧州各地に造成された。

しかし、1960年以降にWilhelmina Jashemskiらが行ったポンペイでの庭園発掘が進んだことが契機となり、左右対称に草木を植える庭園は古代ローマ時代には殆ど見られなかったことが明らかになった。また、申請者が進めてきた庭園壁画や史料上での言及の調査からも、所謂フォーマル・ガーデンの存在は見出しがたく、むしろ「森」のように草木が生い茂った庭園像が確認された。すなわち、これまで考えられてきたような「古代ローマの庭園像」は実際の庭園像とはかけ離れており、再検討が必要だとわかった。

2. 研究の目的

本研究は、Jashemskiがポンペイの庭園遺構をもとに提示した「古代ローマの庭園はフォーマル・ガーデンではない」という指摘を史料・壁画から裏付けた上で、「ではなぜルネサンス期以降の西洋では、古代ローマの庭園がフォーマル・ガーデンであると認識されるに至ったのか」という点を模索するものである。

3. 研究の方法

本研究を行う上で、大きくわけて二つの検証をおこなった。一つは、古代ローマ時代に書かれた庭園に関する史料の再検証であり、もう一つは、ルネサンス期以降に書かれた庭に関する史料を分析し、それらの史料が古代ローマ時代の史料にどのように影響されていたのかを見るものである。

a. 古代ローマ時代に書かれた庭園に関する史料の再検証

古代ローマの庭園について言及した同時代史料について、これまでThesaurus Linguae Latinaeで収集してきた。しかし、当時の人々の自然観について触れた史料については収集しきれていなかった。ラテン語史料における庭園とその周辺の記述の再検証を行うことで、古代ローマにおける自然や庭園に対する認識への理解を深め、ルネサンス期以降の西洋社会における自然観への影響を明らかにする。

b. ルネサンス期以降に書かれた庭に関する史料と、その中に登場する古代ローマ時代史料の言及の検討

古代ローマ時代の庭園に関する史料・遺構・壁画でフォーマル・ガーデンは確認できないにもかかわらず、その起源はこれまで古代ローマの庭園に帰されてきた。「フォーマル・ガ

ーデン」という庭園様式や概念が史料に登場し、また図版や絵画の中で見られるようになるのはルネサンス期以降であるが、この時代の人文学者や芸術家が古代ローマ時代の庭園の再現を試みた際には、古代ローマの庭園遺構や庭園壁画が発見されていなかったため、彼らは史料に依拠して庭園の再現を行った。古代ローマ時代に書かれた庭園に関する史料を誤読ないし深読みした結果、古代ローマ時代には実在しなかった「フォーマル・ガーデン」を生み出すことに繋がったとするならば、キケロ、ウィトルウィウス、大プリニウス、小プリニウスをはじめとする古代ローマ時代の著者によって書かれた庭園に関する史料を、ルネサンス期の人文学者・芸術家がどのように紐解き、解釈したのかを探る必要がある。庭園に関するラテン語史料の注釈や、芸術家や建築家が庭園を設計する際に著した図版や説明をもとに、どのような知識や概念を古代ローマの史料から後世の人々が取り入れていたのかを明らかにする。

4. 研究成果

新型コロナウイルス感染症流行により、海外の図書館・資料館での調査ができなかったため、研究計画の大幅な変更を余儀なくされた。具体的には、本研究の方法論の二つ目の観点、すなわち「ルネサンス期以降の人文学者・芸術家がどのように古代ローマの著作家によって書かれた庭園に関する史料を解釈し、造園してきたのか」という点を知るための資料調査を十分に行うことが出来なかった。特に、当初調査する予定だったイタリア語やフランス語で執筆された文献を検討出来なかったのは悔やまれる。唯一の例外は、英国で刊行された庭園に関連する史料の調査で、1563年に Thomas Hyll が著し、英国で広く読まれた英国最古のガーデニング本(*A most briefe and pleasaunte treatyse, teachynge how to dresse, sowe, and set a garden*)や、その前後に刊行されたグランド・ツアー参加者たちによるイタリアで目にした庭園の記録、さらには庭園や農業に関する本を大英図書館ならびにオックスフォード大学ウェストン図書館で調査することができた。これらの史料の検討を通して、すでに英国では十六世紀において幾何学的な迷路を植物を使って作られており、また古代ローマ時代に書かれた農業書に言及しているが、その迷路などの特殊な造園の技術は、古代ローマ時代の庭園に関する記述に依拠していないことがわかった。他方、農業書は特定の作物の育成方法や収穫の時期、どのような立地に植えるべきかといった、実践的な造園知識を得るためにこれらの史料が使われていたと明らかになった。そして、先行研究で指摘されている通り (eg. Hunt, J. D. (1986) *Garden and Grove: The Italian Renaissance Garden in the English Imagination 1600-1750*, Princeton)、古代ローマ時代の庭園描写にインスパイアされたルネサンス期の庭園を模倣した庭を英国で作るのが流行するのは、十七世紀以降であり、その広がりにはグランド・ツアーが貢献していたことも確認できた。

さて、国外での調査を必要としない一つ目の研究方法に基づく研究により長い時間取り組むことができた結果、これまで申請者が取り組んできた研究を大きく進展させる研究成果を得ることができた。それは、古代ギリシアの哲学学校と庭園・建築との関連性である(刊行物 5)。これまでも、哲学学校と庭との関連性については指摘されているが、庭・植物・建築構造・彫刻・出土した別荘・出土した炭化パピルス群などを総体的に検証し、さらにこれらの事物に付随する空間がどのように史料上で描かれ、どのような知見をもとに個々の単語が執筆時に選択されてきたのかを検討した結果、より具体的かつ説得的に「哲学と庭や建築空間」との繋がりを説明することができた。この研究成果をさらに拡大させるべく提出した科研(若手研究)「古代ギリシア哲学が古代ローマの住宅に及ぼした影響に関する研究」

は 2023 年度に採択されており、現在はより多くの遺構や史料分析を行いながら、哲学と建築・庭園との関連性について検証している。

本研究実施期間中には、ポンペイの庭園復元の歴史と、その問題点について論じた論文（刊行物 1）、「ヘレニズム化」をどのように同時代を生きた大カトとスキピオ・アフリカヌスが受けとめたのかを建築や文化の受容の観点から論じたもの（刊行物 2）、庭の周辺の空間にしばしば見られる列柱廊を意味する言葉をウィトルウィウスがどのように使っていたのかを検討した論稿（刊行物 3）なども刊行した。この他にも、本研究課題とは直接の関係はないものの、ウィトルウィウスの『建築書』が古代ローマ時代の著者によってどのように受容されていたのかを検討した論文や（刊行物 4）、ウィトルウィウスの『建築書』が大プリニウスの『博物誌』にどのように影響していたのかをオエクスという空間名称から繙く論稿（刊行物 6）、天文現象を歴史史料から繙く共著論文（共著論文 1,2）などの執筆に取り組むことができた。これらに加え、本研究課題に関連する研究発表を行うのはもちろんのこと、他の研究テーマでの研究発表や研究集会をオンラインや対面で企画・開催し、西洋古典学の諸研究の様相を積極的に公開するよう努めた。

最後に、本研究課題に取り組んでいる期間中には、コーネル大学がポンペイで行っている Casa della Regina Carolina と呼ばれる家の庭園発掘（トレンチ B）にスペシャリストとして参加した他、The Gardens of the Roman Empire (online) にウェスウィウス山周辺の庭園遺構の専門家として参加している。現在は、私的な庭園と公的な庭園とがどのように相互作用し合っていたのかを検討する研究プロジェクト 'Greening' Roman Architecture: Gardens in Public and Private Spaces（古代ローマ建築を「緑化」する：公共・私的空間における庭園）をエディンバラ大学の Ben Russell 准教授と共に立ち上げている。今後は私的な庭園空間だけでなく、公的な庭園も視野に入れた研究を進めようとしている。

以上のように、研究計画に変更が必要となり、結果として研究対象の史料群を限定しなければならぬ事態にも直面したが、本研究の計画時に目指した目標は概ね達成することができた。なお、検証ができなかった史料群については、今後の研究において調査をしようと考えている。

研究成果物（抜粋）

a. 刊行物

1. 川本悠紀子「ポンペイにおける庭園の復元」、海野聡（編）『「復元学」の提唱』、吉川弘文館、2019 年、209-229 頁。
2. Yukiko Kawamoto 'Hellenization: Responses of Scipio Africanus and Cato the Elder', *The 2nd RCCZ International Conference. Intermingling and Hybridity in Contact Zones* (Seoul, Chung-Ang University), 2019, pp. 29-35.
3. Yukiko Kawamoto 'Peristyles and Gardens in Pompeian Houses', in Anguissola, A., Iadanza, M., and Olivito, R. (eds.) *Paesaggi domestici. L'esperienza della natura nelle case e nelle ville romane - Pompei, Ercolano e l'area vesuviano* (Rome, L'ERMA), 2020, pp.29-33.
4. 川本悠紀子「古代ローマにおけるウィトルウィウスの『建築書』とその受容」、木俣元一・松井裕美（編）『古典主義再考 I 西洋美術史における〈古典〉と〈古典主義〉』、中央公論美術出版、2020 年、49-75 頁。

5. 川本悠紀子「キケロの書簡にみるアテナイの哲学学校と古代ローマの別荘」、周藤芳幸（編）『古代地中海世界と文化的記憶』山川出版社、2022年、344-367頁。
6. 川本悠紀子「ウィトルウィウスから大プリニウスへ」、岡北一孝（編）『「建築と古典主義」2022年度日本建築学会大会（北海道）建築歴史・意匠部門パネルディスカッション資料』、日本建築学会、2022年、3-9頁。

b. 共著論文

1. Hayakawa, H., Fujii, Y. I., et. al. 'Three case reports on the cometary plasma tail in the historical documents', *Journal of Space Weather and Space Climate* 11, 2021, pp. 21-32.
2. Murata, K., Ichikawa, K., et. al. 'Cometary Records Revise Eastern Mediterranean Chronology around 1240 CE', *Publications of the Astronomical Society of Japan* 73(1), 2021, pp. 197-204.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 川本悠紀子	4. 巻 419
2. 論文標題 春日大社の七種寄木と大プリニウス	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地中海学会月報	6. 最初と最後の頁 3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 川本悠紀子	4. 巻 4
2. 論文標題 開催報告 レクチャー&セミナーシリーズ：西洋古代におけるジェンダー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 GRL Studies	6. 最初と最後の頁 105-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 川本悠紀子	4. 巻 1
2. 論文標題 ウィトルウィウスから大プリニウスへ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 2022年度日本建築学会大会（北海道） 建築歴史・意匠部門 パネルディスカッション資料	6. 最初と最後の頁 3-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 川本悠紀子	4. 巻 443
2. 論文標題 ジェームズ・ローブとLoeb Classical Library	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 地中海学会月報	6. 最初と最後の頁 6-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川本悠紀子	4. 巻 62
2. 論文標題 第12回 韓中日西洋古代史国際シンポジウム参加記(韓国語)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西洋古代史研究(韓国西洋古代歴史文化学会)	6. 最初と最後の頁 79-80
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川本悠紀子	4. 巻 150&151
2. 論文標題 2021年韓・中・日シンポジウム覚書	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 かいほう(古代世界研究会)	6. 最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yukiko Kawamoto	4. 巻 1
2. 論文標題 The Influence and Limits of Hellenization in Roman Architecture	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The 12th Korea-China-Japan Symposium on Ancient European History. War, Peace and Hegemony in Antiquity	6. 最初と最後の頁 58-66
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Murata Koji, Ichikawa Kohei, Fujii Yuri I, Hayakawa Hisashi, Cheng Yongchao, Kawamoto Yukiko, Sano Hidetoshi	4. 巻 73
2. 論文標題 Cometary records revise Eastern Mediterranean chronology around 1240?CE	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Publications of the Astronomical Society of Japan	6. 最初と最後の頁 197 ~ 204
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.1093/pasj/psaa114	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hayakawa Hisashi, Fujii Yuri I., Murata Koji, Mitsuma Yasuyuki, Cheng Yongchao, Nogami Nagatoshi, Ichikawa Kohei, Sano Hidetoshi, Tsumura Kohji, Kawamoto Yukiko, Nishino Masaki N.	4. 巻 11
2. 論文標題 Three case reports on the cometary plasma tail in the historical documents	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Space Weather and Space Climate	6. 最初と最後の頁 21~21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1051/swsc/2020045	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計11件(うち招待講演 6件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 川本悠紀子
2. 発表標題 ウィトルウィウスから大プリニウスへ
3. 学会等名 日本建築学会大会(建築歴史・意匠部門 パネルディスカッション 建築と古典主義)(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yukiko Kawamoto
2. 発表標題 Greek Philosophy and Statuaries in Roman Gardens
3. 学会等名 Politeismo en la naturaleza en el occidente romano(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川本悠紀子
2. 発表標題 英国・ドイツ・イタリア・スイスでの西洋古典・西洋古代史研究の研究書の利用について
3. 学会等名 西洋古代史研究における史資料の安定的利用をめざして(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川本悠紀子
2. 発表標題 共和政末期以降におけるギリシア哲学の影響：古代ローマの別荘・庭園を手掛かりとして
3. 学会等名 第21回古代史研究会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川本悠紀子
2. 発表標題 記憶から創造へ：異文化の記憶とその受容（キケロを中心に）
3. 学会等名 日本西洋史学会 小シンポジウム1 古代地中海世界における知の動態と「文化的記憶」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川本悠紀子
2. 発表標題 ギリシアの哲学学校を再現する：前一世紀の古代ローマの建築・庭園と哲学とのかかわりについて
3. 学会等名 日本西洋古典学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yukiko Kawamoto
2. 発表標題 The Influence and Limits of Hellenization in Roman Architecture
3. 学会等名 The 12th Korea-China-Japan Symposium on Ancient European History War, Peace and Hegemony in Antiquity (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yukiko Kawamoto
2. 発表標題 Raphael von Koeber and Classics in Japan (and beyond)
3. 学会等名 The Guangqi Classics Lecture and Seminar Series (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yukiko Kawamoto
2. 発表標題 Roman Gardens and Medicinal Plants
3. 学会等名 Kyunghoe University, Research Seminar at the HK -Institute for Integrated Medical Humanities (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川本悠紀子
2. 発表標題 古代ローマの庭園とその植生：史料・壁画・遺構の見地から
3. 学会等名 上智大学史学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yukiko Kawamoto
2. 発表標題 Hellenization: Responses of Scipio Africanus and Cato the Elder
3. 学会等名 The 2nd International Conference of Reconciliation and Coexistence in Contact Zones [RCCZ] (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 川本悠紀子（周藤芳幸編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 464
3. 書名 『古代地中海世界と文化的記憶』（担当：「第十二章 キケロの書簡にみるアテナイの哲学学校と古代ローマの別荘」）	

1. 著者名 川本悠紀子（木俣元一、松井裕美編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 480
3. 書名 『古典主義再考 西洋美術史における「古典」の創出』（担当：「第一部 ウィトルウィウスの『建築書』の古代ローマにおける受容」）	

1. 著者名 川本悠紀子（海野聡編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 344
3. 書名 『文化遺産と 復元学』（担当：「第6章 ポンペイにおける庭園の発掘とその復元」）	

1. 著者名 Yukiko Kawamoto (eds. Anna Anguissola, Marialaura Iadanza, Riccardo Olivito)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 L'ERMA di Bretschneider	5. 総ページ数 254
3. 書名 Paesaggi Domestici. L'esperienza della natura nelle case e nelle ville romane Pompei, Ercolano e l'area vesuviana. (1.2 The Colonnaded Space in Vitruvius' De Architectura)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Researchmap
https://researchmap.jp/yukiko.kawamoto

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会	開催年
Lecture and Seminar Series: Gender in Classical Antiquity	2021年～2022年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	Cornell University		
英国	University of Reading		
イタリア	Parco archeologico di Pompei	British School at Rome	